



Title	「勉強もせんと、遊んでばかり、気がいたらお母ちゃんになってしもて」：わが哲学的半生
Author(s)	志水, 紀代子
Citation	メタフュシカ. 2004, 35(2), p. 1-4
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/4637">https://doi.org/10.18910/4637</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「勉強もせんと、遊んでばかり、気がついたらお母ちゃんになってしもて」

## 【ご退官に寄せて】

学生時代から両先生と最も永く親交を持ってこられた志水紀代子先生に、  
今回の退官を記念して、編集委員から饞の言葉をお願いいたしました。

## 「勉強もせんと、遊んでばかり、 気がついたらお母ちゃんになってしもて」 — わが哲学的半生 —

### 志水紀代子

大学に入学してから43年が経過した。ついに大学を出られないままで、今に至っている。花の35年組—60年安保の3人組の中で、私学にいる私は、良くも悪くもまだ現役で、多忙極まりない毎日である。同じ大学には、60年安保世代の同窓の同僚もいるが、やはり専攻において、伊達四郎・高橋昭二という二人の類稀な個性的で優れた師匠に師事してきたことで、退官された浅野遼二・里見軍之のお二人との繋がりがひとしお意味深く、感慨深いのは否めない。

お二人がそれぞれに師匠の薫陶を受けて、そのライフワークにおいてもいい仕事を残され、後輩の指導に当たってこられたことは、すでに周知のことであろう。それに比すれば、私はいわば講座の「鬼子」であった。お二人には到底及ばず、自己流、勝手流で、伊達先生に言われた言葉が実に象徴的で、今でも耳で聞こえるようである。「勉強もせんと、遊んでばかりいて。気がついたらお母ちゃんになってしもて」。そんな言葉を手懸りにしつつ、この講座において、お二人とかかわりあって過ごしてきたわが哲学的半生をここで少しばかり振り返ってみたい。

先に述べたとおり、私たちが入学したのは1960年、いわゆる60年安保の年である。戦後15年、文学部の入学定員は60名で、男子学生は詰襟が普通だった。阪大の襟章が誇らしく、学生はまだまだエリートだった。生活は貧しかったが、しかし政治的には熱い時代で、安保反対のクラス決議をしては、全学でバスに分乗して、御堂筋デモに出かけていた。そんな時

「勉強もせんと、遊んでばかり、気がついたらお母ちゃんになってしまて」

代、池の直ぐ下に下宿していた浅野さんの部屋は、その主の風貌や面倒見のよさで、クラスのみんなの溜まり場のようになっていた。この時代に培ったクラスの一体感、そしてここに集まった仲間たちが、後年浅野さんが病に倒れ、リハビリをしつつ現役として頑張っていられる大きな支えになっていたのではなかろうか。それは自らの病に対峙しつつ真摯に哲学していかれた伊達先生ご自身を髣髴とさせるものでもあった。

やがて、「全学連」の政治の季節は終焉を迎えるが、私は、とある昼休み、クラスの友人に誘われてバレー部のコートに連れて行かれた。軽々とボールを弾き返して楽しむ部員のなかで、運動神経だけは自信のあった私が、いくら弾き返そうとしてもボールは飛ばなかった。このとき、目からうろこが落ちた。御堂筋デモの時もまるで無関係であるかのように練習をしていた人たちを偏見の目でみていた自分を恥じた。それがバレーボールとの出会いであった。伊達先生には「遊んでばかりいて」といわれてしまったバレーボールだったが、一番簡単そうに見えたパスが、もっとも難しかった。

やがて私は大学院生になったとき、バレー部の一年先輩と、ボールの取り持つ縁で結婚した。「わたしたちは一緒になることで、もっと自由になります」と仲間の前で宣言したのだったが、実際に子どもが生まれて、修士論文を書かなければならなかったとき、子育てと論文作成を両立できない極限状況に追い込まれて、さすがの私も、仕事か子供かの選択を迫られた先達の苦勞をようやく思い知った。

「やっぱり私には哲学は向いてないかもしれない」と夫に弱音を吐いたとき、彼はこう言った。「残念ながら君に哲学が向いてるとボクには言えない。なぜならボクの専門と違うからや。けど、人間、やることのある限りは、やるしかしゃあないやないか」と。

このことばはまさにカントの実践哲学そのものだったのである。わたしはこの強烈な大阪弁のインパクトで目が覚めた。そうだった。私のありのままのこの状況で、「私の哲学」をすることが必要だったのだと。焦って空転していた頭が正常に再び回転を始め、伊達先生の退官に修士論文が辛うじて間に合った。病弱だった先生は、その一年後に逝ってしまわれた。その間、不肖の弟子は博士課程に進んで、地域にも学校にも当時まだ子どもを預かってくれる保育所がなかったの、仲間といっしょに阪大の豊中地区に共同保育所を作っていたのである。

刀根山の裾野にあったその共同保育所は、24年後に閉所され、作ったときのメンバーとその子どもたちが中心になって、最後の記録を冊子に残した。

院生のころ、法文経の建物が無期限ストで封鎖されていて、私は子どもを保育所に迎えにいった、そのまま子どもを伴って団交に参加したことがあった。教授席に座っておられた高橋先生が、つと立ち上がり、にこにこしながら息子のところに来て、ご自分の喘息のために持っておられたであろう飴玉を渡して下さった。今は取り壊されてしまった文学部前の木造校舎の一室でのことである。いささか陰鬱な緊張した空気のなかで、先生の歩かれた床がギシギシ鳴っ

ていたのを思い出す。亡くなられてはや20年が経ち、そのときの息子は一児の父となって、いまは夫婦ともども言語聴覚士の仕事をしている。

前後するが、高橋先生が癌で逝かれたのは1984年2月19日のこと、1月に57歳の誕生日を迎えられて間なしであった。里見さんについて、このときの忘れられないコマがある。この訃報を私はミュンヘンで受け取った。二人の息子を伴っての子連れ留学中であったが、夫の送ってくれた高橋先生の遺著『若きヘーゲルにおける媒介の思想（上）』は衝撃的だった。それは、永久に（下巻）は出ないことを覚悟した（上巻）だったからである。膨大なノートの山を書斎に残したままで、二度と戻ることがなかったその人から、私は人間が生きること・学問することは「未完の完」なのだと教えられた。

83年の4月、先生は豊中市市民病院に入院中で、ご挨拶に行ったとき、「結核の再発だから心配ないよ」とおっしゃった。それがお目にかかった最後だった。その後肺ガンを手術されたことを知った。それが成功したと思ったのもつかの間、脳に転移して、ご自身も今度は死を覚悟され、遺書のようなお手紙を下された。その知らせが日本から入ったとき、ご自宅にお電話して話したのが最後になった。その日は8月6日で、朝からヒロシマ、ヒロシマとラジオのニュースが伝えていた。奇跡的にその手術が成功したとき、ご本人に生への希望が仄見えたという。やがて12月に血尿が出だして、腎臓への転移がわかり、残酷にもその希望を打ち砕く。そんな壮絶な人生のドラマを目にしつつ、当時助教授だった里見さんは、次年度の授業計画を立てなければならなかった。その中に、高橋昭二の名はもはや入れることはできない。その作業をしなければならないジレンマが綴られた里見さんのそのときの手紙も壮絶であった。

社会の「常識という柵」は、いまでも目に見えないところで時代精神を形成しているが、それに抗いつつ、いつしかここまできたように思う。

今、私は高橋先生が亡くなられた年齢を越えて、伊達先生の晩年の64歳になった。私がこの二人の師匠に言われた、「**哲学を学ぶのに女を忘れなければ、あるいは、哲学は女には向かない**」ということばに、これまでのどのような哲学者も、「時代の子」であったということを感慨を込めて思わずにはいられない。そして「弁証法的に」二人の師匠に鍛えられた自分もまた「時代の子」であったと、来し方を振り返りつつ、つくづく思うのである。

第二講座の「鬼子」は、目下2005年7月に出版を予定している韓国の「戦争と女性人権センター」との共同プロジェクト「日韓女性による共通歴史教材」の編纂に追われる日々である。

危機的な暗礁に幾度も乗り上げつつ、それでも後へ引くことができないのは、多くの出会いの中で鍛えられ、培われてきたことと決して無縁ではない。とりわけさんごん迷惑をかけた里見さん浅野さんのお二人には、ただ感謝の一語に尽きる。苦言を呈しつつも、叱咤激励し、見

「勉強もせんと、遊んでばかり、気がついたらお母ちゃんになってもて」

捨てることなく暖かい手を差し伸べて、今日まで見守っていただいた。お二人から支えられ、与えられて来たものは、後から来るひとたちにバトンタッチしていかねばならない。それが私に課せられた責任であろうと思っている。